

〔報告〕

## 子どもの理解を深めることをめざした フィールド観察の効果

長谷川 桂 子   石 井 康 子   出 井 美智子

### An Evaluation of Educational Way for Nursing Students' Observation of Children

Keiko Hasegawa, Yasuko Ishii, and Michiko Idei

#### I. はじめに

看護を学ぶ学生が対象である人を理解するとき、学生は対象への関心を高めることが求められる。現在の学生の出生した頃である1980年の合計特殊出生率は1.75であったが、その後さらに少子化が進み1999年には1.34になっている。この状況の中で育った学生は子どもとの接触経験が少ないまま、看護を学ぶために入学してきたと思われる。

吉田ら<sup>1)</sup>は1993年に看護学生の子ども観を研究する中で、子どもとの接触経験について調査している。それによると、接触経験の「少ない」及び「なし」とする学生は乳児で6割、幼児で4割、小学生で5割、中学生で7割であった。少子化が進んでいる現在、学生の子どもとの接触経験は更に減少していると推測される。そして、現在の一般的な学生の特徴として少子化による兄弟姉妹数の減少があり、学生は子どもと日常接する機会が少なく、子どもを理解することが難しいと考えられる。

そこで、育成される側の子どもの看護を学ぶにあたり、子どもへの関心を高め、健康な子どもの成長発達についての基本的学習を受ける際に、子どもの理解が深まることを目的に、地域の中で日常生活を送っている子どもを実際に観察する学習（以下フィールド観察という）を実施した。導入期の教育方法として、フィールド観察の効果を検討したのでその結果を報告する。

#### II. フィールド観察の概要

フィールド観察は入学直後から開講される育成期看護学概論Bの中で実施した。育成期看護学概論Bにおける育成される側の子どもに関する授業の目的は対象である子どもの理解を深め、子どもが必要とする看護の役割と機能について学ぶ事である。

フィールド観察は図1のような流れで実施した。1回から4回まで育成にかかわる人々に関する授業、その後5～7回目で図1にあるような育成される側の子どもに関する授業、7回目の終了時、学生にフィールド観察の学習内容を説明した。学生に授業時間の1コマ（90分）を観察目的で自由に使ってよい時間として与え、説明から4週目にグループワークを実施した。説明からグループワークまでの間に、保健・医療・福祉などの場における看護職の活動状況を知り、看護に対する基本的な理解を深める目的で、導入実習が実施された。学生の約半数が育成期領域の現場で2日間の実習をした。

##### 1. 学生に説明した学習内容

###### 1) 目標

日常生活場面の中で子どもの様子を観察し、健康な子どもの特徴や子どもの生活について理解を深める。

###### 2) 方法

日常生活場面の中の子どもの様子を観察し、各学生に観察記録をグループワークの前日までに提出させた。記録は、子どもの推定年齢、観察場面、観察した内容、観察して気づいたこと・感じたことをまとめさせた。観察

4月	入学
5月	育成 育成にかかわる人々に関する授業 (1～4回)
6月	成 育成される側の子どもに関する授業 5回－子どもの置かれている社会状況 6回－小児看護の変遷と動向・課題 7回－小児看護における家族看護・フィールド観 察について説明(5月23日) 第1回導入実習(5月30日・31日)
7月	看護 フィールド観察記録提出期間(6月14日～19日) フィールド観察グループワーク(6月20日) フィールド観察グループワーク記録提出 (6月21日)
8月	学 第2回導入実習 授業評価のための調査票記入(7月18日)
9月	概 論 B
10月	育 成 期 看護 方法 5
11月	小児の成長発達－乳児期 小児の成長発達－幼児期 小児の成長発達－学童・思春期 フィールド観察実施前後を振り返っての調査 (11月29日)

図1 フィールド観察実施と評価のための時期

場所は自由とし、例としてスーパーマーケット、公園などをあげた。

## 2. グループワークの概要

グループワークは観察した子どもの推定年齢から乳児3、幼児7、学童4の発達段階別に14グループに分け、1グループの学生数を5～6人で実施した。教員は3人参加し、成長発達の正常な姿の確認や話し合いが進まない場合に介入するようにした。

グループワークは観察記録を開始時に返却し、これをもとに意見交換を行い、「子どもとは」について考えさせることを目的にした。最初の60分間で健康な子どもの特徴や子どもの生活について話し合い、その後の30分間グループワークで話し合ったことを発表し、学びを共有できるようにした。終了後、グループワークで話し合った内容を記録として提出させた。

グループワークの終了時、教員は学生に観察したことが正しいのかどうか(たとえば年齢や発達状況)などを、今後子どもの成長発達などを学習する中で学び、振り返って考えて欲しいと話した。

## III. 方法

1. 2000年度看護大学入学一年生80名が実施したフィールド観察記録から、観察した子どもの発達段階・観察場所を分類した。発達段階は学生の記録から分類した。
2. グループワーク記録から、その内容を精神・運動機能の発達で分類した。
3. 育成期看護学概論Bの授業評価のための調査票から、フィールド観察に関する記録を抽出し、よいと評価したものとそうでないものの件数と内容を整理した。
4. フィールド観察が子どもへの関心を高め、健康な子どもの成長発達の理解に影響を及ぼしたかを検討するために、フィールド観察実施の前後を振り返って調査(以後調査という)を実施した(図1)。調査はグループワーク終了から約5カ月後に、目的を学生に説明し承諾の得られた78名に実施した。調査の実施時には育成期看護方法5の中で、健康な子どもの乳児期から思春期の成長発達に関する授業は終了していた。

調査は無記名で、有無の選択と自由記載を併用した。調査項目は子どもに接する機会、子どもへの関心、フィールド観察実施の困難・楽しさ、実施後に学生が自覚した変化、その後の小児の成長発達を理解する上で参考になったかについてである。結果は比較のために $\chi^2$ 検定を行った。

## IV. 結果

### 1. 学生のフィールド観察記録からみた実施状況

#### 1) 観察した子ども

学生1名が観察した子どもは複数が多かった。一場面に多数の子どもがいて人数が不明の場合を1人とみなし、学生1名あたり平均4.7人を観察していた。1人の子どもだけを観察した学生は14名だった。

学生が観察した子どもは、乳児26人、幼児116人、学童37人、中学生以上1人であった。その他発達段階不明のものが数人あった。

#### 2) 観察した場所

学生が観察を行った場所は多岐にわたり、学生は1名

あたり平均2.2ヶ所で観察をしていた。1ヶ所で観察した学生は33名で、最大7ヶ所で実施していた。

観察を行った場所の内訳はスーパーマーケットやコンビニエンスストアなどの販売店が一番多く29件、ついで公園と路上が21件、自分や親戚の家が18件であった。観察期間中に実施された導入実習施設で観察した学生は17名いた。その中の3名は、導入実習施設だけを観察場所にしていた。

## 2. グループワーク記録の内容分類

グループワーク記録の内容を感覚（例：歌や音に反応する）・運動（例：物を握る）・情緒（例：よく笑う）・社会性（例：人見知りをする）・その他に分類した。乳児では感覚・運動・情緒に関するものが、社会性に関する記録より多かった。その他として親の保護が必要や、導入実習施設である乳児院の子どもは転倒しても泣かないなどをあげていた。

幼児では感覚・運動・情緒に関する記録は社会性に比べて少なく、その内容は成長が早い・表情が豊か・感受性が強い・駄々をこねるなどであった。社会性に関する記録は、真似をしたがる・注目されたい・成長に従ってルールが守れる・興味のあることに集中するなどであった。その他として、頭が大きいなどがあった。

学童では社会性に関する記録が大半を占め、その内容は仲間・リーダー・友人・男女差に関する事であった。

## 3. 授業評価の調査票からみたフィールド観察の評価

育成期看護学概論Bの授業評価で、17名の学生がフィールド観察についての意見を記載していた。「授業方法が適切であったか」の問いに、13名の学生は観察したことによって理解が深まった・気づいたことがあった・新しい発見をした等のよい評価内容を記載していた。

その他に、もっとじっくり観察したかった・もっとフィールド観察がしたいなどの意見があった。1名のみグループワークが何をしているのか分らなかったと記載していた。

## 4. フィールド観察実施前後を振り返っての調査

### 1) 子どもと接する機会・関心

ここ1年以内に子どもと関わった経験のある学生は39名（50.0%）であった。また、日常及びここ1年以内のどちらかで、子どもと接する経験のあった学生は44名（56.4%）であった。43.6%の学生は1年以内に

表1 観察実施前の子どもへの関心の有無と

フィールド観察実施時の困難の関連

関心		計 (N=78)	なし (N=22)	あり (N=55)	どちらともいえない (N=1)
困難					
なし		44 (56.4)	9 (40.9)	35 (63.6)	0 (0.0)
あり		34 (43.6)	13 (59.1)	20 (36.4)	1 (100.0)
内容	どこにいるか、わからない	24	10	14	0
	見知らぬ子の観察困難	2	0	2	0
	怪しまれないか不安	5	2	3	0
	何歳の子かわからない	1	0	1	0
	観察やレポートの方法がわからない	5	1	3	1
	その他	3	2	1	0

表2 観察実施前の子どもへの関心の有無と

フィールド観察を実施時に楽しかったかの関連

関心		計 (N=78)	なし (N=22)	あり (N=55)	どちらともいえない (N=1)
楽しかったか					
あり		65 (83.3)	14 (63.6)	50 (90.9) *	1 (100.0)
理由	色々な興味を示してかわいい	18	6	12	0
	子どもの行動が不思議	23	3	19	1
	子どもとの交流・観察が楽しい	11	3	8	0
	その他	16	2	14	0
なし		13 (16.7)	8 (36.4)	5 (9.1)	0 (0.0)
理由	周囲の目が気になる	2	2	0	0
	課題だったので楽しめない	2	0	2	0
	その他	3	2	1	0

\*P<0.005

子どもと接する機会が無かった。

フィールド観察実施前に、子どもへの関心があった学生は55名（70.5%）であった。

## 2) フィールド観察実施時の状況

### (1) 実施に際しての困難の有無（表1）

実施に際して困難を感じた学生は34名（43.6%）で、困難の内容として最も多かったのは、「子どもがどこにいるかわからない」24件、ついで「怪しまれないか不安」5件であった。フィールド観察実施前の子どもへの関心の有無からみると、関心があった学生の20名（36.4%）、関心がなかった学生の13名（59.1%）が困難を感じた。両者の間に有意差はみられなかった。

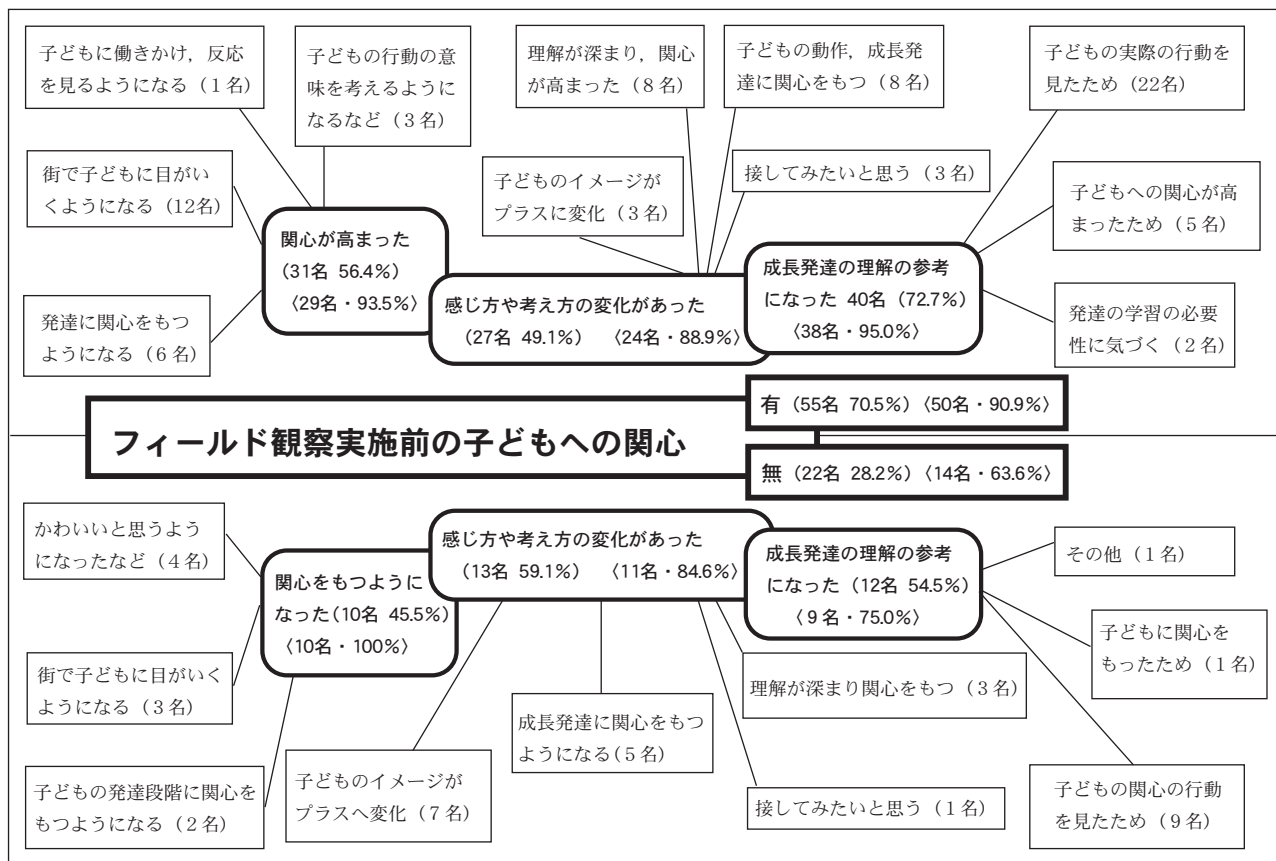


図2 フィールド観察実施前の子どもへの関心の有無からみたフィールド観察の影響  
 (< >内は其中でフィールド観察を楽しんだ学生数)

## (2) 実施時の感想 (表2)

実施時の感想は「楽しいと思ったか」の問いによって行った。その結果、実施して楽しいと思った学生は65名（83.3%）で、その理由は主に子どもの行動の不思議さや、子どもがいろいろなことに興味を示すことに対してであった。フィールド観察実施前の子どもへの関心の有無でみると、関心があった学生55名中50名（90.9%）は楽しいと答えた。しかし、関心のなかった学生では22名中14名（63.6%）のみが楽しいと答え、両者の間には有意に差があった。（ $P<0.005$ ）

## 3) 子どもへの関心の有無からみたフィールド観察の影響 (図2)

影響は学生が観察後に自覚した子どもへの関心・感じ方や考え方の変化と、子どもの成長発達を理解する上で参考になったかどうかである。また、それぞれの< >内には其中でフィールド観察を実施して楽しいと思った学生数を明記した。

### (1) フィールド観察実施前に子どもに関心があった学

### 生への影響 (図2上段)

フィールド観察実施前に子どもに関心があった55名への影響は、図2上段に示すとおりであった。観察実施後、関心が高まった学生31名中12名は、街で子どもに目がいくようになり、感じ方や考え方が変化した学生27名中8名は、理解が深まり更に関心が高まったとした。成長発達の理解の参考になった学生40名中22名は、その理由を子どもの実際の行動を見たためとした。

感じ方や考え方が変化を自覚しなかった学生は28名で、その内7名は既に子どもに対するイメージがあり変化しなかった。

### (2) フィールド観察実施前に子どもに関心なかった学生への影響 (図2下段)

フィールド観察実施前に子どもに関心なかった22名への影響は、図2の下段に示すとおりであった。関心をもつようになった学生10名中4名は、子どもをかわいと思うようになり、感じ方や考え方が変化した学生13名中7名は、子どものイメージがプラスに変化した



と述べた。成長発達を理解の参考になったとした学生12名中9名は、その理由を子どもの実際の行動を見たためとした。

フィールド観察実施後、子どもに関心を持つようになった学生10名は、すべてフィールド観察が楽しかったと答えた。この10名中5名は、子どもに対する感じ方や考え方が変化し、子どもの成長発達を理解する上で参考になったと答えた。残りの5名のうち4名は、子どもに対する感じ方や考え方が変化したと答え、1名はその理由を「特におどろくようなことがなかった」としていた。この5名の学生のうち成長発達を理解する上で参考になったのは1名であった。

また、フィールド観察実施後も、子どもに関心をもつようにならなかった学生は12名であった。そのうち4名はフィールド観察を実施したことで、子どもに対する感じ方や考え方が変化したと答え、4名中3名が子どもの成長発達を理解する上で参考になったと答えた。この12名のうち、フィールド観察を実施しても子どもに対する考え方などが変化しなかったのは8名で、8名中3名は子どもの成長発達を理解する上で参考になったと答えた。そして、この12名のうちフィールド観察を楽しみと思った学生は4名のみであった。

最終的に5名の学生が子どもに関心をもてず、感じ方や考え方が変化せず、成長発達を理解する上での参考にならなかったと答え、その理由については未記入がほとんどであった。この5名のうちフィールド観察を楽しみと思ったのは1名だけであった。

## V. 考察

フィールド観察は育成される側の対象である子どもへの関心を高め、理解を深めることを目的に実施した。以下、フィールド観察の効果と工夫の必要性、及びフィールド観察の展開と今後の課題について考察する。

### 1. フィールド観察の効果と工夫の必要性

現在の学生は少子化の中で育ち、日常子どもと接する機会が少なく<sup>2,3)</sup>、子どもへの関心など<sup>4,5)</sup>は減少傾向にあると報告されている。今回実施した調査では、日常及び1年以内に子どもと関わった経験のある学生は56.4%、子どもに関心を持っていた学生は70.5%であった。

このような背景を持つ学生であるが、グループワーク

で学生は自分の観察した子どもについて楽しそうに語っていた。そして、健康な子どもの発達について学習する前であったが、グループワーク後に提出したまとめの記録を見ると、乳児期・幼児期・学童期の子どもの特徴に気づいていることがわかる。学生はフィールド観察で気づいたことをグループワークの仲間に伝え、お互いの気づきを共有しあうことができた。学生の中には子どもと接する機会がなく、子どもを理解することが難しい学生もいると考えられる。学生はフィールド観察という課題を与えられ、子どもを観察する機会をもつことで子どもに目が向く。そして、これは学生の後の学びに影響する。このことは、授業評価のための調査票に自分の目で見て、自主的に学べたことがよかったと記載した学生がいたことから推測できる。

調査から、フィールド観察後に学生が自覚した子どもへの関心・子どもに対する感じ方や考え方の変化は、観察前の子どもへの関心の有無や、フィールド観察実施を楽しみと思ったかどうかにより違いがあった。図2の下端に示すように、関心のなかった学生で実施して楽しかった学生は、フィールド観察後に自分の中の変化に気づき、子どもに関心をもつようになった学生が目立った。そして、その後開講された、健康な子どもの成長発達に関する授業の参考になったと述べた学生もいる。

しかし、フィールド観察前に子どもに関心がなく、かつ実施して楽しかったと思わなかった学生では、一部だけがフィールド観察による自分の中の変化に気づき、子どもの成長発達に関する授業の参考になったとした。だが関心がなくかつ実施を楽しみと思わなかった学生の中の5名は、自分の中に変化が認められず、子どもに関心をもつことができず、授業の参考にならなかったとした。これは観察の方法に問題があったか、この授業の進め方に問題があったのか検証をする必要がある。観察についてのヒント、授業の進め方を工夫すれば、この数を減らすことができるかもしれないと考える。だが、関心のなかった学生の22名中10名(45.5%)はこのフィールド観察をしたことによって、関心をもつようになった。

調査の中で、34名(43.6%)の学生はフィールド観察の実施に際して困難を感じた(表1)。その理由は、「どこに子どもがいるのか分らなかった」が一番多かった。学生が観察した場所を分類すると、事前に例示した

場所であるスーパーマーケットや公園が多かった。半数弱の学生が実施に際して困難を感じたが、学生1名が観察した子どもは平均4.7人、観察場所は2.2ヶ所であった。与えられた課題であるため、しなければならないとの義務感から多くなったとも考えられる。しかし、実施して楽しいと思った学生が65名（83.3%）いたことから楽しさがその数を増加させたとも考えられる。

その他に観察に際して困難を感じた理由として、「怪しまれないか不安を感じた」と述べた学生が5名いた。学生が観察のため子どもを見つめている姿に不審を抱くのは、観察される側の親にすれば当然のことかもしれない。また観察期間中に子どもの誘拐事件があり、親などから不審に思われまいかと学生が感じた事も影響していると考えられる。

このことから実施にあたっての場の例示は、観察される側のことも含めて考慮する必要がある。学生が観察することに困難を感じることなく、周りの目を気にすることなく観察できる場を例示することが教員には求められる。

## 2. フィールド観察の展開と今後の課題

健康な子どもの成長発達やそれを促す援助を理解し、さらに病気の子どもの援助を理解する段階まで、子どもの看護の学習をすすめるにあたって、子どもに関心を持つことは重要なことである。飯村ら<sup>6)</sup>は学会誌・看護雑誌における小児看護学に関する研究から今後の動向と課題として「子どもに接した経験の少ない学生に対して、実習前の授業や演習で子どものイメージをどのように伝えていくかを考えていかなければならない」と述べている。また、市江は<sup>7)</sup>学生の子どもに対するイメージの看護学学習前後における変化を研究する中で、「講義は子どものイメージに影響を与えるが、教科書のみでの学習ではなく、いわゆる視聴覚教材の役割も大きいと考えられる」と述べている。授業内容の工夫は市江が述べているようにビデオなどによる視聴覚教材の活用も重要である。しかし、飯村らが述べているように子どものイメージをどのように伝えるかを考えると、実際に存在する子どもを目のあたりにすることは子どもに接する経験の少ない学生に大きな影響を与える。その結果、子どもに興味を持つことができれば、その後の子どもの理解は順調に進む可能性がある。

今回、入学約2カ月後にフィールド観察を実施した。これは子どもの看護に関する学習を始めて間もない時期が、子どもとの接触経験の少ないと予測される学生に相当と考えた結果である。早期体験（Early exposure）の意義<sup>8)</sup>として「できるだけ早い時期に『体験』することの意義として、学習の効率化が図られるだけでなく、『夢』をイメージでき、さらに関心・意欲が増すという効果がある」と言われている。この事からも学習の導入として、フィールド観察は子どもの看護に関する学習を始めて間もない時期に実施するのが妥当と考える。また、観察期間に導入実習があり、観察場所として導入実習施設を選択した学生がいた。導入実習施設には障害をもつ子どもや病気で入院している子どもも含まれる。導入教育として子どもへの関心を高め、成長発達の理解をする上で参考にするには、地域で生活している健康な子どもを観察することが効果的であると考えられる。これらのことから、今後はフィールド観察の時期を導入実習に影響されない、子どもの看護に関する学習を始めて間もない時期にしたいと考える。

フィールド観察実施にあたり、教員は学生に複数の子どもを観察させたいと考えていなかった。学生が複数の子どもの観察記録を提出したことに驚きを感じた。そのため、学生が子どもを観察することに困難を感じていたと考えなかった。後の調査で、学生の半数弱が困難を感じたと回答したことで大変さを理解した。フィールド観察実施に関する説明で、観察する子どもの数を明確に伝えなかったことがこの状況を招いたと考える。

その後に開講された健康な子どもの成長発達を学ぶ授業の中で、教員は意識的にフィールド観察で学生が観察したことを想起させるような授業をしなかった。振り返ってみれば、学生の中に意識として残っていることを授業に盛り込むことが、効果をあげる事になる。今後はこのことを意識して授業の展開を考えていく必要がある。

吉澤<sup>5)</sup>は学生が子どもを身近にとらえられ、小児看護学の理解を深めるための教育方法を研究し、成長発達の授業終了後に子ども用品売り場で親子の行動を観察させている。その中で、学生は観察をすることで、自分の子どものころを思い出し、親子関係が楽しそうで、それまでより子どもを身近に感じる事ができたと述べている。そして、観察は小児看護学の対象の理解に効果的だった

と述べている。観察により学生の学びや子どもへ関心がより高まることは、観察させた時期はまったく異なるがこのフィールド観察においても言える。学生がより子どもへの関心を深め、子どもの看護に関する学びがスムーズに進められるようにしていくために、今後さらに学生が取り組みやすいフィールド観察を考える必要がある。

## VI. おわりに

今回、入学間もない学生に実施した子どものフィールド観察について、導入期の教育方法としての効果を検討した。その結果は以下のようである。

- 1) 学生はフィールド観察をしたことで、子どもの理解が深まった。
- 2) 子どもに関心のなかった学生22名中10名(45.5%)は、このフィールド観察をしたことによって子どもへの関心をもつようになった。
- 3) 検討結果は、フィールド観察がもともと子どもに関心のあった学生の関心を高め、関心のなかった学生に子どもへの関心をもたせる効果をもつ、可能性のあることを示唆している。
- 4) もともと子どもに関心がなく、かつ観察したことが楽しくなかった学生のほとんどに、本教育の効果を見出すことができなかった。このような学生に対して、今後どのようなアプローチが効果的か検討したい。
- 5) 36名(43.6%)の学生がフィールド観察の実施に際して困難を感じていた。これを解消するため教員は、学生への説明内容・観察場所の例示などについてあらかじめ検討する必要がある。

最後に、今回この調査に協力してくださった学生の皆様に感謝致します。

## 参考文献

- 1) 吉田由美, 梶山洋子他: 看護学生の子ども観～子どもの関係性の見方と接触経験の程度との関連～, 日本小児看護研究学会誌, 2 (1); 39-47, 1993.
- 2) 外間登美子, 岡美恵子ほか: 乳幼児の接触経験と母性意識について—女子学生のアンケート調査より—, 思春期学, 16 (3); 328-331, 1998.
- 3) 岡美恵子, 外間登美子ほか: 乳幼児の接触経験と父性意識について—男子学生のアンケート調査より—, 思春期学,

17 (1); 130-133, 1999.

- 4) 楠木野裕美, 鈴木敦子ほか: 本学学生の子どもへの接触体験と認識に関する横断的調査, 大阪府立看護短期大学紀要, 12 (1); 51-61, 1990.
- 5) 吉澤ひろみ: 学生が、こどもを身近にとらえられるための工夫, 日本看護学教育学会誌, 10 (2); 201, 2000.
- 6) 飯村直子, 筒井真優美ほか: 小児看護学教育の最近の動向と今後の課題, 日本看護学教育学会誌, 8 (3); 11-17, 1998.
- 7) 市江和子: 小児看護学において看護学生が子どもに対して持つイメージの変化—小児看護学学習の前後におけるイメージ形成要因—, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 10; 47-54, 1999.
- 8) 21世紀の医療をつくる若手医師の会研修問題委員会: 「体験」の重要性, 学生のためのプライマリケア病院実習(日野原重明監修), 1版; 5, 医学書院, 1995.

(受稿日 平成13年2月23日)